

事例概要（相談支援従事者研修現任：予定者コース）

氏名：大阪 三郎（24歳 男性）

障がい：知的障がい 広汎性発達障がい 療育手帳 B1

家族構成：【同居】母（49歳）：パート

【別居】姉（28歳）：隣市にて夫と乳幼児2人との4人暮らし。家事、育児などで多忙ではあるが、本人や母のことを気にかけている。

父：14年前に離婚し、その後は音信不通である。

1994年5月5日	出生（5月5日誕生）
2000年	療育手帳（B1）取得
2001年	小学校入学
2004年（小4）	両親離婚
2007年	中学校入学
2010年	支援学校高等部入学
2013年3月	支援学校高等部卒業
4月	アパレル会社入社
2014年3月	アパレル会社退職
5月	障がい基礎年金受給 広汎性発達障がいと診断
2015年	弁当工場に就職
2016年	グループホーム入居
2018年	現在

【三郎さんの出生時】 ※ は本人談

1994年5月、予定日より1か月早く出生した。生下時体重2100g、仮死状態で生まれ保育器を1週間利用する。定額8ヶ月、初歩1歳5ヶ月、発語3歳0ヶ月。乳幼児健診で発達の遅れ、言葉の遅れなどの指摘を受け、保健センターのグループ指導を利用する。家ではミニカーが好きで1日中縦列に並べて一人で遊んでいた。保育所には一般枠で通所するが、集団の動きについていけず、言葉でのやりとりが難しい面が見られた。小学校入学前に保健センターの勧めで、療育手帳（B1）を取得する。

【小中学校時代】

小学校では国語、算数のみ支援学級を利用し、その他は普通学級で授業を受けた。字を書くことは好きで、気に入った数字や車の名前をよく書いていた。社交的な性格でクラスメイトの誰とでもおしゃべりをしていたが、会話の理解が難しく、時々勘違いのためにトラブルになることがあった。また、人懐こく、自分からクラスメイトに関わろうとすることも多かった。特に、女子とおしゃべりをするのが楽しかったようで、無理に女子グループの輪の中に入っておしゃべりしようとすることもあったが、次第に邪魔者扱いをされることが増えていき、トラブルになる場面もみられるようになった。本人は、邪魔者扱いをされる理由が分からず、先生から注意されると腹を立てて怒り、ふてくされて近くの壁を蹴ったりすることもあった。

体を動かすことは好きで、上手くできなくてもスポーツは何でも率先して行おうとする様子がみられた。スポーツ活動にも積極的に参加する姿勢がみられた。また、音楽も大好きで、音楽会では大きな声で唄をうたう様子がみられた。毎日の練習の成果を発揮し、自信を得ることができた。

日常生活（ADL）についてはほぼ自立していた。難しい内容でなければ指示もなんとか理解でき、会話も可能であるが、通常とは違うことに対して適切に対応することは苦手であった。また、困った時には人に尋ねるなど、臨機応変に問題を解決したり物事を判断する力も十分ではなく、見通しが立たない状況では混乱することがあった。何事に積極的に関わろうとはするが、上手くできず、注意や指示を受けることで大きな混乱状態に陥ることもしばしば見られた。

小学校4年生のときに父母が離婚する。母も就労をはじめ、本人との関わる時間が少なくなった。姉は本人の面倒をよくみており、母が仕事で帰ってくるのが遅くなると、よく2人で晩御飯の用意をしていた。本人も姉の言うことはよく聞いていた。

保育園 悪さして怒られた。おさぼりした。ちょっと恥ずかしかった。授業するのが、お遊戯が恥ずかしかった。写真を撮った、お遊戯の写真撮影が嬉しかった。お遊戯、緊張しました。

⇒A 市立小学校（支援学級 1～6年）

1年…みんなと楽しくできた

2年…女の子といっぱい喋れて楽しかった。

先生と大喧嘩した。2年からちょっと嫌になって…

支援学級の先生と揉めて、クビと言われた。2つの部屋に分かれた。

授業の時は別々のお部屋に分かれたから…（悔しかった）

3年生は普通で、4年生はモテモテ。5年生も。

6年生の時に揉めた。手が出た。なんで揉めたかは覚えてない

小中で、近所の友人の妹に嫌われた。近寄ったら「来るな！来るな！」と言われた。ちょっとふざけたかな？お父さん、でていった。よくお母さんと喧嘩してた。お父さん、怒ったら怖いけど休みの日にサッカーしてくれたけどな。

中学校は地元の中学校に通った。サッカーや将棋などいろいろなことに関心を示すようになり、支援学級の先生やクラスの特定の友人との関係も良く、楽しく過ごしていた。家では、サッカーの中継が好きで、よくテレビで試合を観戦していた。時々、応援の際の言葉遣いが荒々しくなることで家族から注意され、言い争いになることもあった。この頃より、本人にとって気に入らないことがあると、乱暴な物言いをすることが増えていった。

中学校卒業後の進路について本人は、友人と同じ地元の高校に進学してサッカーをしたい気持ちでいたが、成績が十分ではなく進学は難しかった。支援学級の先生より、「サッカーはワールドカップが一番やで。支援学校に行って、ワールドカップに出たらいい」と言われ、支援学校高等部への進学を決めた。

支援学校高等部では、サッカー部に在籍して試合に出ることもあった。本人は、3年間トラブルもなく、楽しく過ごすことができたと話しているが、学校の先生曰く、クラスの中では乱暴な言葉を使って先生から注意されたり、些細なことがきっかけでクラスメイトと喧嘩することが多かったとのことだった。また、予定を自分で勝手に決めてしまい、変更になると暴れたり、学校から保護者が呼び出されることも頻繁にあった。

・中学校 高校

クラスで英語の試験したけどクビって言われて、居残りされた。で、どんぐり教室（支援学級）

英語で居残りしたけど、ダメで、支援学級に。悔しかった。

先生や友だちともうまくいって、嫌なことなかった。サッカー部に入って、何やってたかな・・・将棋もやってたかな・・・ゲートボールもしてた。ワールドカップに出たら、外国に行けるやろ。きれいなお姉ちゃ

んいるやろ。だから、支援の高等部ってん。サッカー部入った。試合出たけどアカンかった。3年間楽しかった。先生とトラブルはなかった。友達いっぱいできたから（トラブルなかった）。女の子にイヤとよく言われた。何でかな？

【支援学校高等部卒業後】

卒業後、アパレル会社のバックヤードで働き始めた。毎日規則正しく出勤していたが、職場での人間関係でしんどくなったのか、帰宅後、職場の不満や文句を大声で述べ、母と言い争いになることが目立つようになった。本人の不平不満に付き合いきれなくなった母は、職場に連絡したが、職場の理解が得られず1年で退職することになった。

20歳の頃、障がい基礎年金申請の診断書作成依頼のために、精神科を受診した。その際、広汎性発達障がいがあると診断された。その後、定期的に精神科を受診するようになった。

アパレル会社を退職した後は、母が本人の再就職を渋ったため自宅での生活を続けていたが、昼夜逆転するなど生活リズムも乱れていき、時間を持て余して自分の思うがままに振る舞う状態になった。そのため、一時的にショートステイの利用を行うこともあったが、ショートステイ利用後に自宅へ戻ると、母とのトラブルがさらに増えるという悪循環に陥った。ちょうどその頃、姉が結婚し隣のB市に住み始める。本人と母との仲を取り持っていた姉がいなくなり、本人と母2人の生活になったことで感情が抑えきれないことが増え、壁を蹴って穴をあけるような行動もみられるようになった。「日中活動を行うことで昼夜逆転がなくなるかもしれない」との精神科医の助言により、母は活動の場について障害者就業・生活支援センターに相談する。半年間の実習を経て、自宅から自転車で15分のところにある弁当工場に就職することになった。弁当工場では、同僚の女性に好意をもっており、楽しく仕事に通っており、とても頑張っている。同僚の女性は年齢が離れていることもあり、本人にとって姉のような存在でよい相談相手にもなっている。休憩時間には、よく家や母の愚痴を聴いてもらっている。

本人の給料などの金銭管理は母が行っていたが、本人は自分が働いて得たお金を自由に使うことができないう事に納得できず、そのことでも度々母とトラブルになっていった。本人はゲームが好きで、新しいゲームが発売されるとすぐに買いに行くようである。母曰く、家はゲームソフトや攻略本であふれており、片づけるようにいっても言うことをきかないとのことだった。

仕事は休まず出勤していたが、家では言葉のやり取りや意見の相違で母とのトラブルが絶えず、そのことで大きな声をあげ近所からも苦情がくるようになり、自宅での生活のしづらさが目立ち始めたため、母と姉で市役所へ相談に行った。

卒業してから、服をつくる会社で働いてアウトになった。まじめにやってなかったから…ということ聞かなくて注意されて。いつも俺だけ怒られるねん。

それから、就ポツ（障害者就業・生活支援センター）に行って、何かできるところがないか相談して、そこから弁当工場。

弁当工場に入るときは手を消毒薬で洗うねん。いい匂いがする。弁当のパック詰めも上手やってチーフがほめてくれた。仕事は楽しい。

3年ほど前から、家で暴れた・・・あれはあかん・・・ということ聞いてくれなかったから・・・

グループホームの体験利用を繰り返し、自宅と同じ市にあるグループホームに入居することになった。職場からも近く、新しい環境にもすぐに慣れ、次第に生活リズムが整ってきた。休日は、グループホームの先輩の秋夫さんと一緒に市内にあるフットサルクラブに行くことを楽しみにしている。フットサルクラブでは、地元の友人との交流もある。また、本人の人懐こい性格もあり、コーチに車でドライブにつれていってもらうこともあった。

先輩の秋夫さんをお手本にグループホームでも率先して動くことが増えた。フットサルをしている時は、生き活きとしており、夢はサッカー選手になってワールドカップに出ることであるとグループホー

ムの世話人に話をしている。

グループホームに入居後1年くらい経ち、秋夫さんが近隣のアパートで一人暮らしを始めた。その頃から、ルームメイトとの関係性が崩れはじめる。共有スペースで出した物を片づけないことで生活の中のそれぞれのルールが交差し合い、トラブルが目立つようになった。またその頃、通っていたフットサルクラブが経営難により閉鎖となり、休日もグループホームで過ごすことが多くなった。本人がリビングのテレビを占領することで、他の利用者とチャンネルの奪い合いとなり、職員より注意されると、自分の意見を上手く表現できず、自分の思いを否定されたと思い込んで、激怒することが次第に増えていった。グループホームの世話人からは、これ以上は手に負えないと言われ、本人の希望もあったことから、現在土日は自宅への外泊を繰り返している。しかし、自宅では、家族に対して文句や欲求が激しくなる。母は、数年前からリウマチの症状があることを検診で指摘されていたが、医療機関を受診する時間も無く、多忙な日々を送り気持ちにも余裕がない様子であった。

本人がグループホームや自宅での生活に窮屈さを感じ出した頃、秋夫さんのアパートに空き室ができたことを知り、そこに住みたいと一人暮らしを強く希望するようになった。そのため、母は姉と市役所に行き今後の生活の相談を行った。市職員は計画の変更申請を受け、相談支援事業所を紹介した。母がZ障がい者相談支援事業所の松井相談支援専門員に連絡をとったため、今回の相談に至る。